

緑丘

小樽商科大学同窓会報第60号

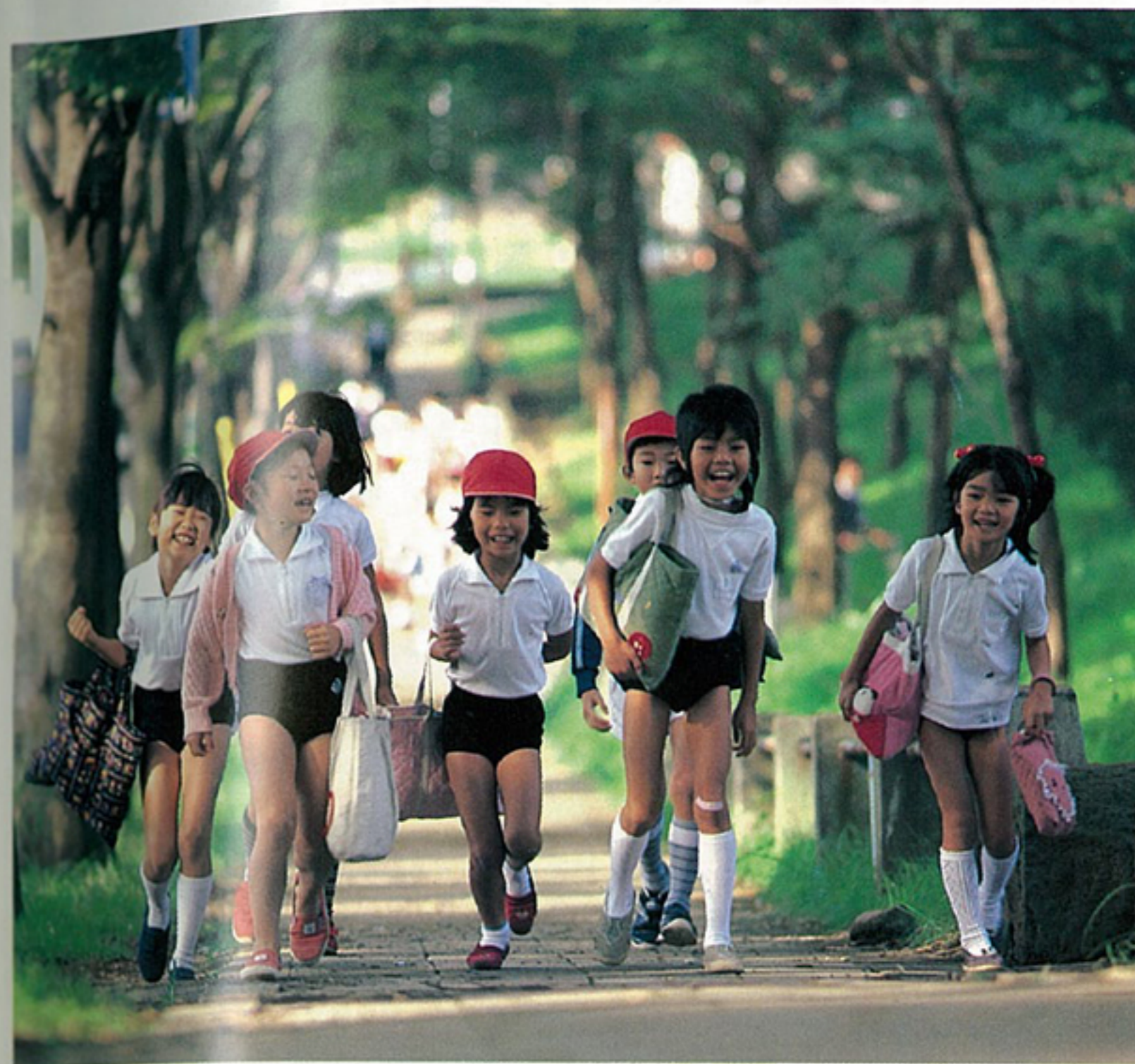
会報第60特別記念号

- 小樽商大特集
- 北海道特集



社団法人 緑丘会

緑丘
昭和六十一年一月五日
〔第六十号〕



人間の環境を豊かにするヒューマナイザー



東急建設株式会社

取締役社長 八木勇平(昭和8年卒業)
〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
渋谷地下鉄ビル TEL.03(406)5111

社団法人 緑丘会

東京都豊島区東池袋三丁目一丁目サンシャイン60(57階)

緑丘

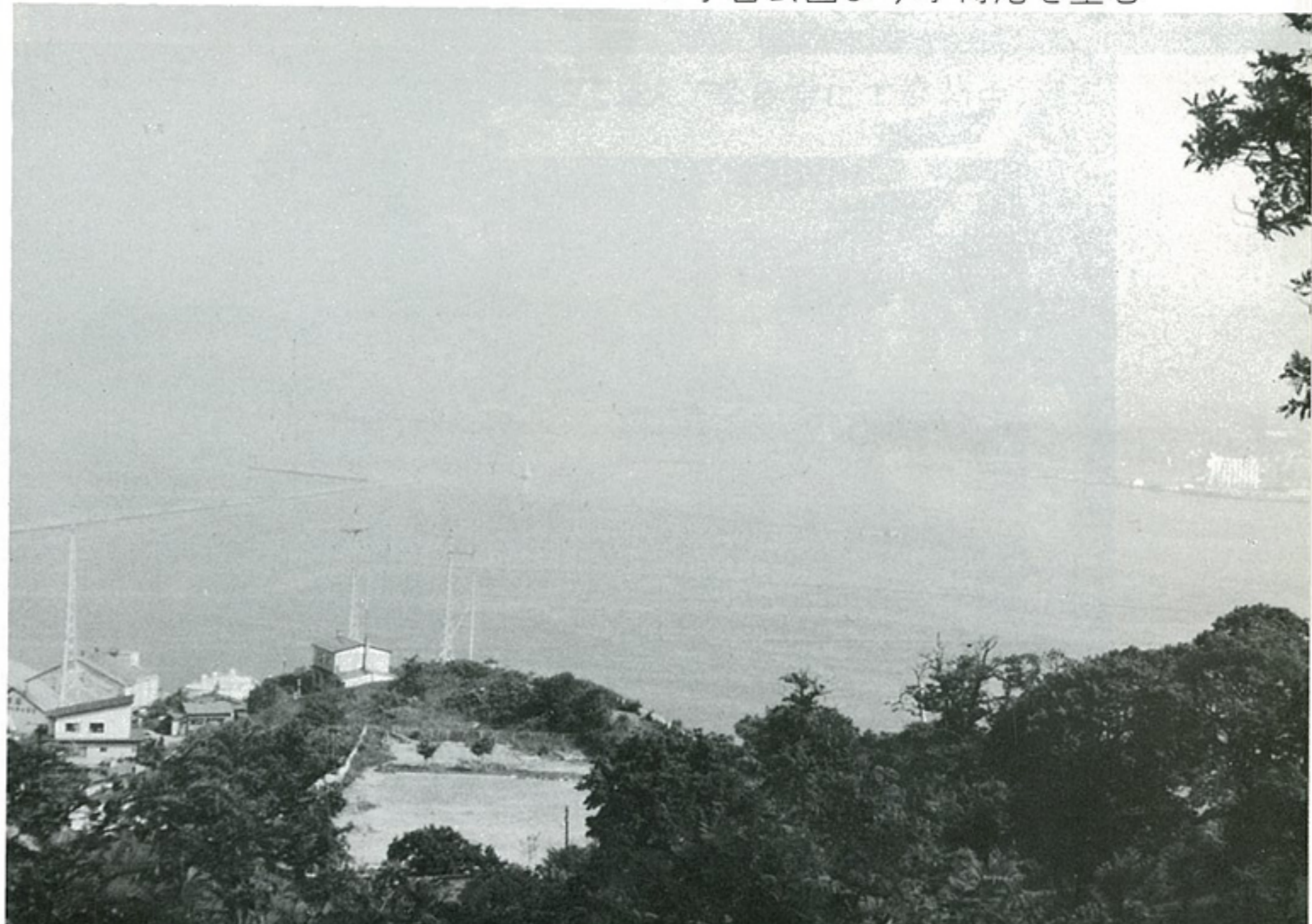
第46回通常総会報告	2
●学園特集●	
小樽商大のこのごろ	藤井 栄一 8
小樽と小樽商大	松尾 正路 18
●北海道特集●	
「母校と緑丘会の発展を祈って」札幌支部座談会	20
札幌支部の歴史と現況について	野澤 悌三 30
緑丘会室蘭支部の近況	33
横綱北の湖の断髪式に臨んで	長谷川 正治 34
終戦40周年記念 緑丘戦没者慰霊祭に参列して	伊藤 文二 36
単科が育くむ仲間意識(月刊『タン』より)	38
物故会員	49
●緑丘各委員会の現況●	50
●恩師近況	
小樽を去って15年	古瀬 大六 55
●随想・手記・短歌・俳句	
西野嘉一郎君の『現代会計監査発展史』	中野 清一 57
私家版『サハリン曼陀羅』	山口 文雄 61
商学博士北條恒一君祝賀 昭和51年卒業生クラス会	鎌倉 啓三 63
新谷昌明君北海道副知事就任祝い	三澤 和男 65
牧野顕吉君のこと一緑丘ただ一人の特攻隊員の死	中島 泰明 66
緑丘出身の特攻隊員 故牧野顕吉君のこと	越崎 清二 70
ある本から——その後及び大韓航空機撃隊事件のこと	沼田 久 71
「北斗寮記念碑」建立の記	鈴木 三七 74
南亮三郎先生を偲ぶ	長谷部 亮一 76
村田錦一さんを偲ぶ	高橋 一男 79
句苑緑丘	81
短歌	82
学園だより	85
支部だより	88
同期会だより	90
緑の紙風船	111
会員異動通知	118
会館利用日誌	129
編集後記	132
表紙画 尾形圭介(二紀会委員・昭34)	

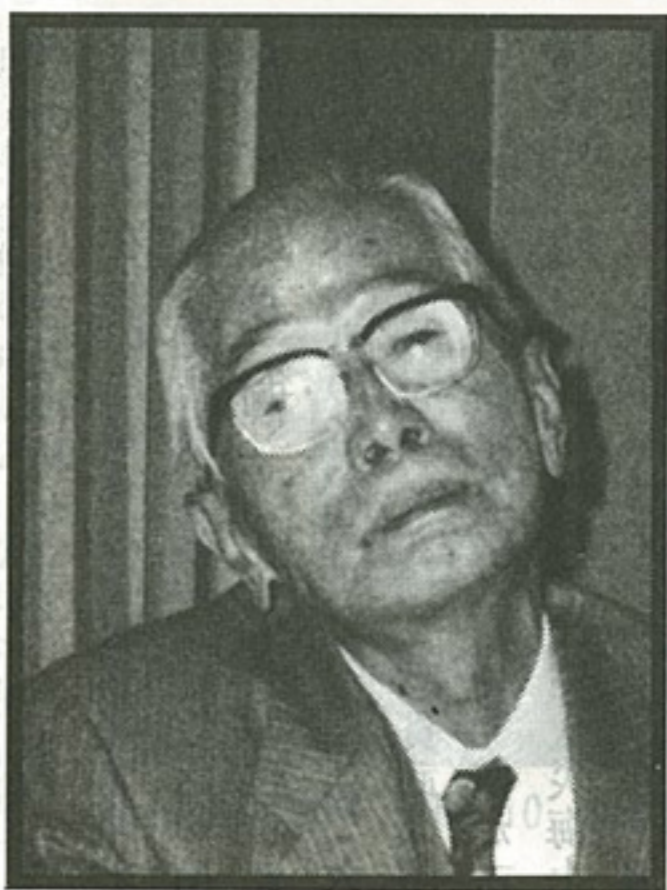


▲尼港殉難者納骨塔（手宮公園）

小樽風景

▼手宮公園より小樽港を望む





南亮三郎先生を偲ぶ

長谷部亮一 (昭和19年卒)

南亮三郎先生は、六十年四月二十六日午後七時、くも膜下出血のため、東京杉並の友愛病院で亡くなられた。先生は、八十八歳のご高齢でありながら、なお現役の人口論研究者として、研究活動を続けておられ、昨年十二月には、千倉書房から『人口論六十年』という著書を出版になり、今年の一月十九日には、『人口学研

究会で、『人口法則と社会主義社会』と題する研究報告を発表され、また本年九月中大出版部から刊行の『人口論古典名著翻訳シリーズ』全三巻について、綿密な監修をしておられる。先生は、大正十二年から昭和二十三年までの二十五年間、小樽高商・小樽経専に在職された。昭和十七年私が入学した頃は、先生の小樽における研究生生活のなかで、最も充実した時期にあつたと思われる。翌十八年に出版された『人口原理の研究』は、東京商大(現一橋大)へ学位請求論文として提出されたものであるが、先生のエッセイによると、その原稿は十七年春に完成されたようである。私は、第三合併教室で受講した経済原論の、あの強烈な魅力というものについ

て、十分に表現すべき術を知らない。先生は瘦身をやや斜めに構えられ、珠玉の名句が満ちあふれるノートの中から、最も適切な言葉のみを厳格に選び出されるかのように、慎重に語りはじめ、ときには軽く眼を閉じて、なかば瞑想にふけるかのように、議論の是非を確かめられながら、次第に堰を切った奔流のごとく、あるいは洋々たる大江のごとく、論じ来たりまた論じ去るうちに、ついには聴く者すべてを、深い陶酔の渦に誘いこんでしまうのであつた。昭和十七年度の経済原論は、全体としてオーストリー学派の色彩の濃いものであつたが、一年間の講義ノートの末尾は、「かくてわれわれは今や、人口論研究のスターティング・ポイントに立ったので

ある。」という、意味深長な一句であつた。経済原論の講義を、人口論研究の出発点として結ばれるのは、まことに南先生ならではのユニークな原論といわなければならぬ。十八年二月から四月にかけて、先生は人口問題調査のため中国へ出張された。帰国された先生を北斗寮にお招きして、お話を伺った夜のことも、忘れがたい思い出のひとつである。それは北辰会と称する、毎月一回寮の食堂で行なわれる集会であつたが、先生は旅行中に記録されたノートをお持ちになり、その数ページをご披露くださった。合併教室のときと同じように、先生はやや斜めに身構えられ、おもむろにノートを開かれる。寮生一同固唾をのんで耳を傾けると、先生は少し微笑まれて、「今日はノートをとらなくともよろしい」とおっしゃり、高まり過ぎたその場の緊張を、絶妙のタイミングで和らげてくださるのであつた。昭和二十三年、私は東京商大(当時は産業大学といつていた)を卒業し、母校

へ奉職することになったが、半年間の在任研究を許され、実際に赴任したのはその年の秋であつた。その時、先生はまことに不運な境遇におられた。ご挨拶にお宅へ伺うと、私の就職を大層喜んでくださり、ご自身が二十五年前に赴任された頃のことを回想され、そして研究者として教師としての心構えを、ご自身のご経験の思い出話という形式で、じんみりとお話しにいられた。しかし、ただひとつのことだけははっきり、「活字になるようなものを書くときは、それがごく内輪の気軽なものであつても、かならず充分気をつけるように」と、繰り返しておっしゃつた。それは、当時の不遇な状況からの、まさに血のにじむようなアドバイスであつたと思う。その後永い間、先生は緑が丘の校舎においてにならなかつた。先生の緑が丘への訣別は、不幸な出来事であつた。けれども先生は、こよなく小樽を愛し、緑が丘を愛しておられたと思う。振り返ってみると、小樽商大関係者のほうに、過度に重

苦しい遠慮というものが、あつたのかもされない。私にとって僅かな慰めは、五十七年六月、無理にお願いして、小樽商大にお立ち寄りいただいたことである。そのとき私は用務のため三日ほど上京し、たしか六月八日の夜遅く帰宅したのであるが、突然先生から電話を頂戴した。札幌においてになっておられるとのこと、何度か電話をいただいたらしいが、出張中家には誰もいなかったもので、ようやく通じたようであり、失礼をお詫びしながらご予約を伺うと、明日は小樽へお出掛けになるとのこと、それではぜひ大学にお立ち寄りくださいと、私は繰り返してお願ひした。しかし、天狗山へ登りたいので、時間がないかもしれぬといわれ、はっきりしたご返事はいただけなかった。ところが、翌日学長室で打ち合わせをしていると、小樽駅から、先生とご一緒のお嬢さんのお電話で、これから学校へあがつていってよろしいかとのこと、私は大喜びで、打ち合わせをそそくさと済ませ、先生をお迎えした。後でお伺いし

たことであるが、その日先生はお腹をこわされ、天狗山を降りられてから、加藤さんのお宅でお休みになったほどで、学内をご覧になるときも、事務棟前で一寸よろめかれた。私は、眼のご不自由な先生が、キャンパス内にある段差のところへ、踏みはずされては危いと考え、腕をかかえるようにして、研究棟前庭（昔のシャンツエ下）までご案内した。

敷地は昭和二十三年のときと同じであるが、建物などはほとんど変わってしまっている、久し振りに校庭を歩かれた先生のお気持ちは、どのようなであつたらうか。五十八年の正月に頂戴した年賀状で、先生は「昨年六月には校庭をかかえて頂いて歩きましたね、うれしかったですよ」と書き添えておられる。

先生はこれまでに二度ほど、ご蔵書の多くを整理・処分されたが、最後までお手元に残されたのは、研究のため常時ご使用になる人口論関係のもの約二千点であり、それらがそっくり小樽商大の図書館へ移され、南亮三郎文庫として永く保

存されることになった。その打ち合わせのためお宅へ伺ったとき、ご長男の亮進さん（一橋大教授）が古い大学ノート三冊を手になされて、「こういうノートを見つけたのですが、何時ごろのものでしようか」といわれる。ノートの表紙には「大陸旅行記」とあり、なかに「大陸人口行脚」と書かれた紙片がはさまっている。

「ああ、あの時のノートが」私は四十二年前の北斗寮での一夜を、胸が一杯になるほどの感慨で想い起すのであった。几帳面な先生は、この他にもいくつかのノートを残しておられ、それらは関係あるひとびとにとって、かけ替えのない貴重な資料となるであろう。特にお願いし、それらのノートをも含めて、図書館へ送っていただくことにした。

小樽高商・経専を通じて、いわば緑丘の輝けるシンボルであつた南先生の、そのお名前を冠した文庫が、母校に永く大切に伝えられるのは、この上なく喜ばしいことである。この文庫は、「人口論の南」にふさわしいユニークなコレクションと

して、高い評価をうけ、所蔵する図書館の声価をも高めることになる。また、二千点のご蔵書やノートに秘められた先生の学問にたいする情熱は、緑丘の学問的雰囲気、何時までも強く鼓舞してくださることであろう。

先生と緑が丘との関係は、不幸な出来事によって中断された。昭和二十三年以降、先生はついで地獄坂をのぼられなかった。ただ一度の例外として、五十七年の六月に、私の強引なお願いを許してくださいただけである。しかしいま、南亮三郎文庫というお姿で、先生はやはり、愛する緑が丘へお帰りになられたのだ、と私は思うのである。

（付記）

南文庫の設置を記念するため、そして先生のご遺徳をたたえ、ご遺族のご厚情に感謝し、かつ母校の発展を願って、記念事業が企画されている。同窓各位のご協賛を、心からお願ひ申しあげたい。

元小樽商科大学学長
日本大学教授

村田錦一さん(大15卒)を偲ぶ

名古屋支部 高橋 一男

(昭和4年卒)

村田さんが緑丘を去られた大正十五年に私が入学したのだから在学中の出会いにはなかった。二十五年前、会社の上司であり先輩でもある石田平八さんから緑丘会名古屋支部長を引継いだ。その頃毎月定期的に有志の午餐会を開いていた。当時東海銀行外務部長であつた村田さんは殆んど欠かさず出席され一杯のビールに頬を染めながら私との交遊が始まつたのである。

村田さんは新潟県村上、私は会津若松が祖先墳墓の地、雪深い城下町、共に下級武士の末裔であり相通ずる何かを持ち

合せていた。昭和三十四年東海地方に特大きな爪跡を残した伊勢湾台風でそれ迄厄介になつていた社宅の屋根が吹き飛ば被害を受けて現住地に引越して来た。それと前後して村田さんも拙宅とは至近距離の処に居を移された。期せずして名古屋東北部の丘陵地に根を卸したことになる。会社の現役を退いて既に久しい歳月が流れた。撫でつけた白髪は薄くなり皺の中に顔がある。お互い毎日が日曜みたいなものを持ち時間をこなすのに苦労する。私共の往来は頻繁になった。一月の凍る様な朝、裾分けだと言つて村上の

塩鮭をぶら下げて拙宅の玄関に立つておられた村田さん、申し合わせて北海道物産展に出かけたり、近くの温泉に何度か一泊旅行を試み子供の様に枕を並べて昔話をした。話はきまつて学生時代に遡る、その頃羽越線はなかったので新潟から郡山經由東北本線で青森に出て渡道した事、同期の誰彼、先生のその後、北大との定期戦、三年間第四寮に起居し剣道とテニスに青春を燃やした事等々、話は尽きないうちに眠っていた。

用もないのに長電話と家族は笑うが、一週間も逢わないとどちらからともなく